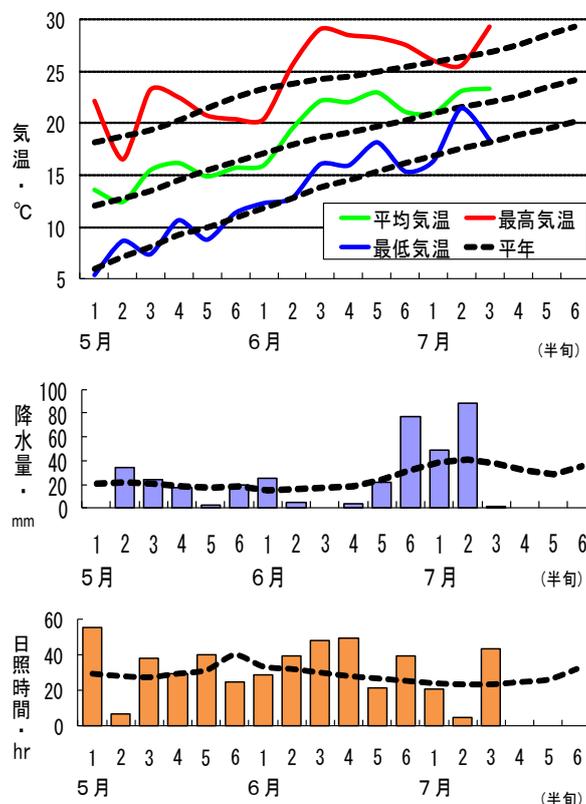


## 天候に応じた栽培管理の実施を！！

### 1 気象経過と生育概況（7月17日現在）

- 6月2半旬以降平年よりも気温は高め、日照時間は多く推移しています。降水量は、6月5半旬から7月2半旬にかけて多くなりました。
- 7月17日現在の生育（5地点平均）は、主茎長が24.1cm（平年比114%）、葉数は5.8葉（同差+1.0葉）、分枝の発生数は0.3本/個体（同差+0.2本/個体）となっています。6月30日以降に数回に渡り大雨があり、ほ場が乾かない日が続いたため、葉色は淡く、下位葉が黄化または脱落しているほ場が多くみられます。
- 仙台管区气象台発表の東北地方1ヶ月予報（7月11日発表）によると、気温は高め、降水量は平年と同様に雨の日が多いと予想されています。今後の気象情報を確認し、天候に応じた管理を行ってください。



### 2 排水対策の徹底

- 近年では、短時間に大雨となる気象災害が多くなっています。降雨後に停滞水が速やかに排出されるように、排水溝同士をつないだり、水尻を深く掘り下げる、明きよを補修するなどの対策をとってください。枕地の畦が排水を妨げるような場合は、畦切りを行い排水路を確保してください。

### 3 培土の実施

培土作業は、以下の点に注意します。

- 遅い時期の培土は、断根や作物体損傷による生育への悪影響の恐れがあるため、最終培土は遅くとも開花の10日前には終了します。管内の平年の開花期は8月2日ですが、近年の高温傾向で開花期は7月末と早まっています。また、播種が早いほ場での開花は7月下旬と早いため、遅れないように注意します。
- 培土作業は収穫時の作業性も考慮し、最終的な培土の高さを本葉第1葉が隠れない18~20cm程度とします。
- 土壤水分が高い時の培土は、株元への培土が不十分となり、株元に残った雑草が大型化しやすいため、除草剤等による除草が困難となります。最終培土は土壤表面が一定程度乾いた状態で行い、畦間の土を砕土・かく拌しながら、確実に大豆の株元に寄せるようにします。

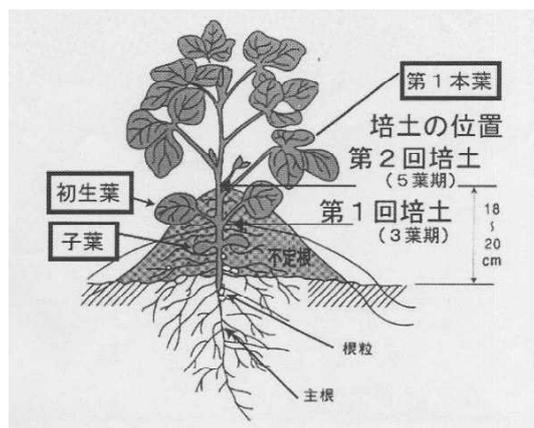


図1 中耕・培土の模式図

## 4 除草対策

中耕・培土で雑草を抑えられなかった場合や土壌水分が高く中耕・培土ができなかったほ場等では、手取りまたは大豆生育期処理除草剤を使用します。中耕・培土作業終了後の畦間等の雑草は、畦間処理剤等により補完対策を行います。

	農薬名	使用時期及び 使用薬量 (L/10 a)	希釈水量 (L/10 a)
畦間処理	大豆バサグラン液剤*	だいでず生育期 収穫45日前 300~500 mL	100
	ザクサ液剤	だいでず8葉期~収穫28日前 300~500 mL	100~150
	ラウンドアップマックスロード	だいでず8葉期~収穫前日 200~500 mL	25~50
畦間・株間処理	バスタ液剤	だいでず6葉期~収穫28日前 300~500 mL	100~150
雑草茎葉兼土壌散布 (畦間・株間処理)	ロロックス	だいでず3葉期~収穫30日前 100~200 g	70~150
雑草茎葉塗布	タッチダウン i Q	生育期、収穫7日前 0.1 mLを1~3か所/株	2倍希釈

※適用品種はリュウホウとする。

注：畦間及び畦間・株間処理では、薬害防止のため専用の飛散防止カバーや専用ノズルを使用します。

## 5 病害虫対策

### ほ場をよく観察してください！

○令和6年6月25日発表の農作物病害虫発生予察情報では、食葉性鱗翅目幼虫(ツメクサガ等)の発生は多いと予想されています。ウコンノメイガは、発生時期、発生量ともに平年並と予想されていますが、急激に発生量が増加する場合もあることから葉巻の状況をよく観察してください。

○気温が高くなると害虫の発生が増加する傾向にあります。東北地方1ヶ月予報では気温が高いと予想されているため、今後の病害虫の発生状況に注意し、ほ場をよく観察してください。

#### (1) ツメクサガ

○第1世代幼虫は6~7月に発生し、葉脈を残して葉を食害します。第2世代幼虫は8月に発生し、葉及び莢も食害し収量が低下します。

○老齢期になると防除効果が劣るため、幼虫の発生初期(若齢期)に散布をします。

薬剤名	希釈倍数	散布量	使用時期
エルサン乳剤	1,000倍	100~300 L/10 a	6月中旬~7月中旬、
トレボン乳剤	"		8月上旬~中旬
フェニックスフロアブル	4,000倍		



ツメクサガ幼虫(6/28確認)

#### (2) ウコンノメイガ

○成虫は主に長距離移動により飛来・侵入します。幼虫は葉縁を巻き込み、その中で葉を食害し、また次の葉に移ります。老熟した幼虫は巻いた葉の中でう化します。

○被害は7月中旬以降に発生しますが、7月6半旬にほ場全体で40~60茎の葉巻数を調査し、1茎当たり葉巻数が1.3個以上あると減収するため、防除を行ってください。



ウコンノメイガ幼虫

薬 剤 名	希釈倍数・ 10 aあたり散布量		使用時期
スミチオン乳剤	1,000倍	150~300 L/10 a	7月下旬~8月上旬
トレボン乳剤	〃		
カスケード乳剤	4,000倍		
プレバソフフロアブル5	〃		



葉巻きの様子

## 6 開花期以降の土壌水分の保持 開花期以降の乾燥に備えてください!

- 大豆は開花~子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあるため、以下の(1)(2)の対策により、大豆の好適な地下水位(40cm程度)の保持に努めます。
- 著しい高温少雨に遭遇した場合は、(3)(4)にある畦間かん水や明きよへのかん水等を行います。ただし、(3)(4)は、十分な用水量が確保でき、速やかな対策が行えるほ場等実施可能なほ場に限られますので、ほ場の条件を確認した上で実施を検討してください。

### (1) 梅雨明け後の暗きよの操作

- 梅雨明け後は、暗きよ栓を閉めて土壌中の水分の保持に努めます。ただし、まとまった降雨がある場合は暗きよ栓を開いて排水を図ります。

### (2) 地下かんがいシステムが備わっているほ場の場合

- 梅雨明け後は、暗きよを閉めて地下水位を40cmに設定し、降雨を土壌に貯留するように努めます。
- 地下かんがいは、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施してください。このときの地下水位は20~30cm程度に設定し、1日給水した後に暗きよ栓を解放して排水します。

### (3) 畦間かん水の日安と留意点

- 畦間かん水は、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施してください。
- 30a以上の大きなほ場の場合は、ほ場を2~3区画程度に分け、1日1区画ずつ2~3日に分けて実施し、畦の崩壊と水口付近の湿害を防ぎます。ほ場(区画)全体に水が行き渡ったら水口をしっかり止め、速やかに排水を行います。なお、かん水は、気温・地温が低下する朝夕の時間帯に行います。
- ただし、十分な水量が確保できない場合や水回りの悪いほ場、速やかな排水が行えないほ場では、湿害等が発生する場合がありますため実施しません。

### (4) 明きよへのかん水の日安と留意点

- 排水口を閉じ、明きよ全体に水を行き渡らせ、その後は速やかに排水します。

**農作業中に熱中症になる人が増えています。予防対策を十分に行い、熱中症を防ぎましょう。**

\*内容についてのお問い合わせは、農業振興普及課(Tel 0186-62-1835)へご連絡ください。